「聖人」「聖心」等多数あるが、共通して見られる「聖」の語の理解は、「智徳の高いこと、またそういう人」の意味に見られる。いずれにしても成果のすぐれた意味である。一方、「浄土」は清浄国土または清浄仏土の略で、「浄」は清浄の義にほかならず、「穢」に対する言語である。彼岸の「浄土」に対し「穢土」といえば迷妄の此岸、つまり娑婆世界である。もっとも娑婆即寂光土という立場もあるが、それも一応娑婆を低い世界に理解したうえでのことである。あるいは「清浄」に対し「汚濁」の「穢悪」が考えられてこのわれらの住む世界が「五濁」の悪世界とも称せられる。いずれにしても「浄」字は「清浄な」または「浄化しゆく」意味にもちいられて、さきの「聖」が成果的なるに比し精神の澄浄を主にし、行因的なことに解される。したがって「浄土」については維摩経などでいうように「浄心」もしくは「心浄」が原理的なものに考えられる。このような言語表現上の差違や対立から見られる「聖」と「浄」、もしくは「聖道」と「浄土」の両者の関係は、本来決して相互に矛盾するものではなくして、かえって相補的、因果的関連を有する語でないかと考えられるのである。すなわち「聖道」がもしかりにこれを史実に照して出家教団の出世間性を端的に表示したとすれば、これに対立したのは世間もしくは世俗であり、あるいは在家者の世界であって、これを「俗」の一語で示すこともできよう。したがって、「聖道門」のほかに「浄土門」の一流を探索することは、そこに出家教団から在家教団への傾斜のあることを意味するであろう。そのような「俗」世間に対置された宗教社会はいわゆる「僧」もしくは「僧侶」の世界で、したがって理想的僧侶社会が「聖道」として受取られたことも考えられる。さて、こうした「聖道」もしくは第一義の（勝義）の世界と俗世間（世俗）に対し、それぞれさきの「浄心」と「穢心」を配当してみると、㈠聖道にして浄心、㈡聖道にして穢心、㈢世俗にして浄心、㈣世俗にして穢心の四の場合となる。仏教の時機観からは㈠の場合が正法の時、㈡と㈢の場合が像法、そして㈣の場合が無仏法に近い末法の時機とも考えられる。浄土教が真にその宗教的特色を発揮するのは、こうした時機佐の反省に即する「聖道」回復の思念いちじるしいときであったとすることができないであろうか。高僧和讃でも『安楽集』の心（約時被機）につけ「聖道万行さしおきて」とか「涅槃の広業さしおきて」とこそうたわれているが、その「さしおきて」はとりわけ右の㈣の場合のことで、㈠の場合については妥当しないと見なければならない。しかも「暴風驟雨にことなら」ない「濁世の起悪造罪」に即し、「すすめて浄土に帰せし」むる「諸仏」のお「あわれみ」を如実に感受していく（勧帰浄土）ところに「非僧非俗」の信心界が現証されて、「本願他力」の崇高性がまさに「聖」の理念において具成するのではなかろうか。他にも『歎異性』の第四節等をも参照すべきであるが今は略する。（ただそこの聖道はここの㈡の場合、そして浄土は㈠の聖道の主体的回復と考えられる）

歎異抄の第一節について

藤原鉄乗

『歎異抄』の第一節を拝読しますと、その文章が三段に切れています。之は改めて申し上げるまでもないのでありますが、曾我先生の『歎異抄聴記』によりますと、香月院師の見解と妙音院了祥師の見解とが紹介されてありまして、了祥師の見解こそ抄の核心を突いているのだと仰せられますが、御尤ものことだと思われます。了祥師の見解は「二種深信」でありましてそれには間違いないのであります。ところで第一節の表面には現われていないのでありますが、

『教行信証』の総序の御文をいただきますと、

「竊かに以みれば難思の弘誓は難度海を度する大船、无辺の光明は无明の闇を破する恵日なり。」

かようにお示しになっています。ここには難度海と无明の闇とがあげられています。難度海とは生死の大河であり、无明の闇とはわれわれ煩悩具足の凡愚であります。この御文から伺いますと、抄の第一節の内容は生死解脱の道をわれわれに教え下されたのであることが端的に伺われます。次に気づかれますことは仏心即ち如来の大慈悲心であります。この大慈悲心が抄全体を貫ぬいているのではないでしょうか、

そこで第三段の文をいただきますと、

「その故は、罪悪深重煩悩識盛の衆生」とありますが、愚老はここに親鸞聖人の関東に於ける廿年の御生活を思い出すのでありますが、同抄の下篇にはわれわれの宿業問題が大きく取り扱われています。そこには、

「また海河に網をひき、釣をして世をわたるものも、野山に猪を狩り、鳥をとりて命を継ぐともがらも、商をもし、田畠をつくりてすぐる人も、ただおなじことなり。さるべき業縁のもよほせば、いかなるふるまひもうべし、とこそ聖人は仰せ候ひしに、」

こうした文がよめるのでありますが、これがいやというほど聖人の眼にふれたのでないでしょうか。ここに尤も具体化された人間生活の有様が読めるのであります。しかしこうした有様を見て見ぬふりするのが、聖人賢者であるかも知れませんが、親鸞聖人は決してさような人ではなかった。いかにもと痛感されたに相違ありません。無条件に同情されたに相違ありません。而して彼等が救わぬとすれば弥陀の本願も生きて来ないと信じられたに相違ありません。そこで抄の結分に移りますが、

「しかれば本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念無にまさるべき善なき故に。悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきが故に、」

かように仰せられていますが、しかし之は決して人倫道徳を無視した見解ではなく、最底の人間生活を認めざるを得ないところからの宣言であると思わしめられるのであります。かように伺いますと、聖人こそ永遠に生きぬいる人でないでしょうか。而して聖人なればこそ弥陀の本願を体解された人でないでしょうか。

支那仏僧の入竺一路に就いて

諏訪義譲